

この御し難き人間の業（2） ——『ピクウィック・ペーパーズ』誕生と

シーマー論争——

青 木 健

ディケンズの精神的様態と文学的表現法を結び付ける作業において無視できない局面は、風刺画家ロバート・シーマー（Robert Seymour, 1798-1836）との確執を軸とした、『ピクウィック・ペーパーズ』（*The Pickwick Papers*, 1836-37）の誕生にまつわる論争である。ここでも、ディケンズの直情的性格が大きな影響を及ぼし、論争は、一過性の問題に終わらず、繰り返されて、有力週刊誌をも巻き込んだの大事となる。マクローンやベントリーなどの出版者たちとの闘争においては、マノンの相貌を払拭できない面があったことは否定できないし、それはディケンズにとって遺憾とする点であったろう。それに対して、シーマーとの確執は、最初純粋にディケンズの美意識と文学的主張に根ざしたものとと言える。さし当たって、その確執は短期間に終わる。シーマーがその間に自殺を遂げるからである。問題が複雑になるのは、彼の自殺に関する見解が、当事者（残されたシーマー未亡人及び息子）とディケンズの間で真っ向から対立したためと、彼らに対するディケンズの対応の仕方に問題があったからである。シーマーの自死は、自分の行動や言動と一切関わらないとするのが、ディケンズの一貫して変らない主張であるのに対して、未亡人は夫の死にはディケンズの行動が深く関わっていると主張するだけでなく、『ピクウィック・ペーパーズ』の評価にまで立ち至って批判した。そのために、ディケンズは繰り返し弁明を余儀なくされた。

本論では、まず『ピクウィック・ペーパーズ』誕生の経緯を辿る中で、この作品の挿絵、特に作品冒頭でシーマーが描いた挿絵に関して起きた問題を明らかにし、シーマーの自殺との関連を考察する。続いて、シーマー未亡人のディケンズ弾劾と彼への執拗な懇願という矛盾した姿、そ

れに対するディケンズ及び関係者の対応について、パテンの「シーマー論争」(‘Seymour Controversy’)の他に、この件に関するチャップマン&ホール社の後代の会長(Chairman)の詳細な「ピクウィック誕生」論、ピンチヒッター的にシーマーの後を襲って挿絵を提供したバス(Robert William Buss, 1804-75)の書簡という、これまであまり公にされなかった資料等をもとに検討する。

一、『ピクウィック・ペーパーズ』誕生の経緯と諸問題

『ピクウィック・ペーパーズ』執筆のきっかけや、それに関係した人々の行動、この作品が軌道に乗るまでの経緯についてここで繰り返すのは、屋上屋を重ねる感があるが、ディケンズの精神と行動の様式を精査するためには避けて通れないポイントである。本論では、従来の資料に増して詳細に書かれた「ピクウィックの誕生」(‘The Birth of Pickwick’)¹⁾や書簡に託したバスの回顧談²⁾に即して、ディケンズを世に送った記念碑的作品の成立事情を追ってみる。

『ピクウィック』の誕生に最も深く関わる人物の一人は、創立6年に満たない出版兼書籍販売を営んでいたチャップマン&ホール社のエドワード・チャップマン(Edward Chapman, 1824-80)である。彼は、パートナーのウィリアム・ホール(William Hall, 1801-47)とともに、ストランド街で張り出し窓を持ったささやかな会社を経営していた。当初二人は書籍商として出発するが、それに飽きたらず、出版に手を染める。フォースターの言葉を借りると、彼らは「どっしりと構えるよりも、身の軽さで売っていた」³⁾という。後の『ピクウィック』との関連で言えば、1835年秋に出した『風刺年鑑』(‘The Squib Annual’)が一つのヒントを与えてくれる。というのも、これには、挿絵が必要であり、37歳の風刺画家ロバート・シーマーが担当していたからである。彼は、ロンドン郊外イズリントンに住み、近隣の川や湖で釣りをしたり、小鳥を鉄砲で撃つロンドンっ子の素人っぽいスポーツ熱を風刺的に見つめ、彼らについてのユーモア溢れた絵を得意としていた。彼は、絵画においては多彩な才能の持主であり、木版・銅版及びスティールのエッチングをこなし、石版工としても卓越していた⁴⁾。

1835年11月、シーマーはチャップマンと会合し、かねて抱いていたア

アイデアを彼に提案する。ロンドンっ子たちのスポーツ・クラブを軸に、彼らがさまざまな戸外のスポーツで失敗する様子をユーモラスに描いたシリーズを月刊で出そうというものであった。チャップマンは、これに賛同したが、一冊本にするには挿絵を説明する文章 (letterpress) を添えること、さらに、二巻本1ギニーで販売することを主張した。これに対して、シーマーは月刊分冊に固執した。議論が沸騰する中、肉体的に疲労困憊していたシーマーは、1年間の仕事のプランをはっきりさせたいと苛立っていた。結局、挿絵に letterpress を添えることというチャップマンの意向と、月刊分冊で発刊するというシーマーの意向がそれぞれ取り入れられ、二人は妥協する。残った問題は、letterpress を書く作家の人選ということになった。

この人選に関しては、いまだに曖昧なところがある。まず、アーサー・ウォーの見解を見てみよう。最初に白羽の矢が向けられたのは、チャールズ・ホワイトヘッド (Charles Whitehead, 1804-62) であったと言っている。彼は、経営者が代わったことにより、内容変更を理由に『マンスリー・マガジン』(*The Monthly Magazine*) を解雇された後、チャップマン&ホール社が発刊した『小説文庫』(*The Library of Fiction*) の編集を担当することになった。チャップマン&ホールは、彼の活動の幅を広げると称して、彼にシーマーの絵に添える文章を書くよう要求した。しかし、ホワイトヘッドは、多忙を理由にその要求を断る代わりに、セオダー・フック (Theodore Fook)、リー・ハント (Leigh Hunt)、トマス・フッド (Thomas Food)、ジョン・プール (John Poole) 等、当時作家・批評家として活躍していた数名の名を挙げた上で、『マンスリー・マガジン』にロンドンのスケッチが掲載され、好評を博していた、ボズ (ディケンズ) の名前に思い至る。実は既に彼には『小説文庫』に執筆を依頼していたのである⁵⁾。

以上が、ディケンズと『ピクウィック』との関連のきっかけに関するアーサー・ウォーの説であるが、正確なエビデンスに定評のある K. J. Fielding はこれに疑問を呈しており⁶⁾、また、『ディケンズ書簡集』の編者も「この説には、明確な証拠がない」⁷⁾と言って疑問視している。この件に関して、当事者であるエドワード・チャップマンの回想を見る前に、同じく『ピクウィック』誕生に関わったパスの回想を見てみよう。彼は、元来役者の肖像画や歴史上の人物・出来事をユーモラスに描くの

を得意とした画家であった⁸⁾。バス自身シーマーの自殺の後、急遽『ピクウィック』の挿絵画家として採用される人物である。彼は、ディケンズが世を去った翌年、『ディケンズの生涯』を著したフォースターに書簡（1871年11月11日付け）を送り、自分が描いた挿絵の不首尾について弁明しているが、その中で、彼はシーマーの絵に添える文を書く人物がディケンズになった事情を次のように回想している。

……ある時、シーマーは、他の用事でチャップマン&ホールを訪問した際、彼らから『ボズのスケッチ集』二巻を貰い受け（彼らも出版者マクロンから購入したのですが）、それらを読んで、この筆者が彼のスポーツ・クラブのアイデアを実現する人物に相応しいかどうか考えて欲しいと依頼されました。

シーマーは、その二巻本を自宅に持ち帰りました。たまたまファミリー・パーティが催されており、友人たちを愉ませようと、彼は『ボズのスケッチ集』を読み上げたところ、居合わせた者はこぞって、挿絵に合う本文を書きうる作家はボズ以外にいないと彼を推薦しました。そこでシーマーは、ボズに折衝すべきであると考えました。シーマーの希望を聞いたチャップマン&ホールは、ディケンズと交渉することになったのです⁹⁾。

バスの回想は、大筋で正確なのであろう。ただ、シーマーが、「その二巻本を自宅に持ち帰り……『ボズのスケッチ集』を読み上げた」ということをバスがなぜ知っているのか疑問である。彼によると、シーマーがディケンズを推薦したことになっている。一方、最終的にディケンズを選んだチャップマンは、後にシーマー未亡人の執拗な追及に業を煮やしたディケンズの依頼に応じて、次のような書簡をディケンズ宛に出している。日付けは1849年7月7日である。フォースターは、『ディケンズの生涯』の中でこの書簡をディケンズ本人から預かっていたと述べて、引用している。『ピクウィック』誕生に関する議論の元になっている資料なので、少々長いが引用する。

……貴下 [ディケンズ] が『クロニクル』紙に筆を執っておられたこと、いや貴下のお名前さえも私は知りませんでした。しかし前に『マ

ンスリー』誌にいたホワイトヘッドがそれを思い出し、『ラムズゲートのタッグズ一家』を書いていただいたのでした。……1835年の11月に、私どもはシーマーの版画挿絵入りの『風刺年鑑』という小さい本を出しました。そして挿絵の具合を見に私が出かけて行った時に、ロンドンっ子を主人公にした狩猟戯画の続き物を、今までよりぐっと念を入れてやってみたいという彼の希望を聞かされたのでした。私は、文章を添えて月刊で出せばうまくいくと思う旨を答えました。その点の折り合いがついて、『デザートつき三品料理』の作者（ウィリアム・クラーク）に手紙で交渉したのですが返事をもらえず、その企画は何ヶ月も棚上げになっていました。やがてシーマーから、引き受ければ手がふさがりそうな仕事がきているので、あれをやるかやらぬか決めて欲しいという申し出があり、そこで貴下へのお願いに踏み切ったわけです。貴下とは『小説文庫』で既にご縁ができており、『ピクウィック』をお願いすることになったのは自然な成り行きでした¹⁰⁾。

チャップマンは、シーマーではなく、自分がディケンズに直接依頼したとしている。このように、『ピクウィック』誕生におけるディケンズ登場に関して、以上三者の見解には、それぞれ指摘したような微妙な違いを認めることが出来る。

いずれにせよ、ディケンズが採用され、シーマーの挿絵に添える文をディケンズが書くという段になって、別なさらに深刻な問題が出来た。当時ディケンズが弟と住んでいたファーニヴァルズ・インに足を運んだチャップマンのパートナー、ホールはディケンズと具体的な交渉を始めたが、ディケンズは、シーマーが提案した「ニムロッド・クラブ」案——クラブのメンバーが狩・釣り等に出かけ、技術不足から失敗する状況を描いた風刺絵にディケンズが説明の文章を添えること——に反対し、代わりに逆提案をする。自分は田舎生まれであるが、スポーツマンでもないこと、そのアイディアは目新しいものでないこと等を理由にその案に反対した上で、代わりに、本文から絵が生じるようにした方が良いと逆提案をしたのである。さらに、自分としては、独自に光景や人物を操りたいと申し出る¹¹⁾。1847年の廉価版の序文にディケンズ自ら『ピクウィック』誕生についてそのように回想している。ホールは、ディケンズの申し出を聞き、「直ちにこの若者の意志の強さと端倪すべからざる

素質を見抜き、彼のアイデアに沿うことに問題ないとその場で確約した」¹²⁾。

ホールが独断で賛同したディケンズの提案は、チャップマンも問題なく受け入れたことは想像できるが、自分の提案を拒否されたシーマーはいかなる反応をしたのであろうか。それを示す直接の資料はないが、後にシーマー夫人は「夫は若者 [ディケンズ] にチャンスを与えるために、彼の採用をチャップマン&ホールに許可した」¹³⁾と回想している。後述するように、彼女の証言は夫寄りで、多くの研究者に信用されていない。それでも、シーマーにとって納得の行かない決定の仕方であったことは事実であろう。夫人の言葉そのものでなかったにせよ、ほとんど世に認められていない、若いディケンズの意見を快諾したチャップマン&ホールたちへの不平不満はあったはずである。ディケンズの案に従うことは、風刺画家としてのそれまでの生き方と業績を否定されたことに等しいわけであり、自分が提案したプロジェクトが実行に移されるという安堵感と、予想外の企画の変更による戸惑い、彼は複雑な思いに駆られたと想像される。

この問題に関しては、三者が関係していたことになる。その三者は互いに綱引きをしていて、かならずしもまとまった関係ではなかった。第一のグループにはシーマーがいた。彼は、この企画はすべて自分のアイデアであると考え、その展開については、自分が最終的決断を下すことになるかと半分確信していたであろう。第二のグループには、出版者たちがおり、資金を出す以上、彼らが成功の確信を持ちたいと願うのは当然である。第三には若きディケンズがいる。彼は既に御し難い資質を明らかにしており、自己の道を突き進もうと堅い決意をしていた。彼は先輩の挿絵画家に対しても、出版者に対しても、少しも臆することがなかった。たとえば、会合は絶えずディケンズが住むファーニヴァルズ・インで持たれた。ホールは、チャップマンとディケンズの間を往復し、次いで挿絵画家へと赴くのである。不思議なことに、ディケンズとシーマーは、『ピクウィック』第一号が発刊されるまで、実際一度も会うことがなかった¹⁴⁾。

ディケンズとシーマーが、第一号発刊前に一度も会合を持たなかったことは、その後の二人の関係を暗示している。前に触れたピクウィック像の創造者という栄誉は誰に与えられるべきかと言う問題について、三

者の言い分は食い違っている。ディケンズは先に言及した1847年の廉価版『ピクウィック・ペーパーズ』の序文で次のように述べている。

……私はピクウィック氏を思いついてその第一号を書き、その校正刷りからシーマー氏がピクウィック・クラブの模様やその創設者の魅力的な姿を絵にしたのだった。ピクウィック氏をクラブと結びつけたのは、もともとの案がそういうものだったからで、ウインクル氏を登場させたのは、特にシーマー氏の便宜を図ってのことだった¹⁵⁾。

ここでディケンズは、「ピクウィック氏を思いついた」のは自分であるが、不滅のピクウィック像を絵にしたのはシーマーの功績であるとしている。確かに、月刊分冊第一号には、シーマーが提案したニムロッド・クラブならぬピクウィック・クラブが物語に導入され、スポーツ自慢のウインクルが登場している。いずれも、シーマーのオリジナルの企画に沿うものであった。ピクウィックと言う名前を付けるにあたって、ディケンズはバースの馬車屋を経営する人物を思い出したという。報道記者として、ジョン・ラッセル卿の選挙運動を担当していた際、たまたまこの馬車屋に借りた馬車を駆ってイングランド西部を走り回っていたのである¹⁶⁾。ディケンズの回想は、シーマーへの配慮が見られるが、それに異議を唱えたのはチャップマンである。彼は、ディケンズの求めに応じて、『ピクウィック』誕生についての彼の回想の正確さを確認する書簡を彼に書き送った際に、次のように述べている。

……この手紙は後々の資料になると思われますので、この件に関するささやかな私の貢献を明らかにしておくのが至当かと存じます。それはピクウィックの絵姿のことで、シーマーが最初に描いてきたのはやせた、ひょろっとした男でした。現在人々の脳裏に焼きついている不滅のピクウィック像は、リッチモンドにいた私の友人、ご婦人方の抗議にもかかわらず茶色のタイツに黒のゲートルのいでたちを改めようとしない、伊達男気取りのでっぶりした老人のことを話してやったのを基にして、彼が作り上げたものです。その男の名前はジョン・フォスターと申しました¹⁷⁾。

なぜ最初シーマーは、ピクウィックの姿を「痩せた、ひょろっとした男」として描いたのだろうか。ディケンズは、シーマーが校正刷りを読み、それに沿って挿絵を描いたとしている。『書簡集』の編者によれば、シーマーは、既にピクウィックに非常に似た人物——「太めの、年配の紳士」(‘a portly, elderly gentleman’)を『クリスマスの本』(*The Book of Christmas*, 1835)の挿絵に描いていると言う。シーマーは従って、そのような人物を描くことの意味を理解していたはずである。また、第一号の内容——ピクウィックがクラブで大演説をする——からしても、「痩せた、ひょろっとした男」を描いた根拠が分からない。憶測すれば、シーマーは、最初校正刷りを正確に読まなかったのではないかと疑われる。チャップマンに指摘されて、初めて納得したかのように、現在見るようなピクウィック像を描いたのではないか。そこには、ディケンズやチャップマンに対するシーマーの抵抗が垣間見えるようである。

「フォールスタッフの時代から、陽気さと肉体は常に結びついている」(‘good humour and flesh had always gone together since the days of Falstaff’¹⁸)とチャップマンに言われるまでもなく、シーマーのそれまでの経験からすれば、「不滅のピクウィック像」(‘immortal Pickwick’)を描くのは容易であったと思われる。しかし、悲劇のシーンを描くのは、シーマーの得意とするところではなかった。シーマーは各号ごとに4枚の挿絵を描くことになっていたが、それらの描かれた挿絵をめぐる、ディケンズとシーマーの間がぎくしゃくするのに時間はかからなかった。まず、2章で描かれた挿絵——「ジングルに挑むドクター・スラマー」(‘Dr. Slammer’s Defiance’)——でちょっとした悶着があった。ディケンズは、スラマーの腕の動きに変更を求めたのである。元の絵では、スラマーが握った拳を振ることで、彼の怒りを表しているが、修正された絵では、手のひらは開いている¹⁹。一見些細な変更だが、ディケンズの見方の方が勝っていることは確かである。シーマーが納得したかどうか不明だが、とにかく修正に応じている。

しかし、第二号(第3章)の「旅役者の話」(‘The Stroller’s Tale’)²⁰の挿絵[「死の床の道化役者」(‘The Dying Clown’)]の問題は、両者の関係に大きな波紋を投げた。ディケンズは再び異議を申し立てたのである。今回、ディケンズは、シーマーを呼び出すという倣岸な態度に出る。彼は、次のような書簡をシーマーに書き送る。日付けは、第一号が発刊

されてまもない、1836年4月14日である。

……ご面倒をおかけ致します。それは次のことです。……それ [The Stroller's Tale] に添えるエッチングのための貴下の図案を拝見しました。素晴らしいと思います。でも、小生のアイディアにぴったりこないところがあります。このエピソードをできるだけ完全なものにしたい



と思いますので、もう一度描き直していただけないでしょうか。……直していただきたい点をご説明したいと思います。[描かれた] 女性はもっと若くあるべきです——「暗い男」の見かけはそんなに惨めでない方が絶対いいのです。[読者の] 興味をそそるためには、男は全体的に同情と憂慮の表情を浮かべるべきです。小生は、死を目の前にした病気の男をやつれた風に [本文では] 描きましたが、[挿絵では] 嫌悪を感じさせて欲しくないのです……²¹⁾。

ディケンズの要請に対して、シーマーはどのように修正したであろうか。「エッチングにおいて、女性 [道化役者の妻] の年齢は変わらず、『暗い男』はもっと若くもっと心配している風に変った。しかし、死の床の道化の顔は、最初の絵で際立って嫌悪を感じさせてはいなかったが、修正された絵では、恐ろしい形相になっており、そのやつれぶりが強調されている」²²⁾。以上のような修正に関して、書簡集の編者は「これは、シーマーが最初はディケンズの指示に従ったかもしれないが、道化の絵に関しては憤怒を抑えられなかった」²³⁾と正しく推測している。というのも、周知のように、帰宅したシーマーは、1日を費やして二号用の挿絵4枚の内3枚をエッチングし終えた後、翌20日早朝イズリントンの自宅の庭で猟銃自殺をしてしまうからである。

シーマーの自殺に関しては、さまざまな推測・憶測がなされたが、多くはシーマーの生来の過敏で神経質な性格に帰している。伝記を辿るまでもなく、彼の38年の生涯は幸せとは言えないところがある。サマーセットシャーのさる郷士 (squire) の庶子という不運な生い立ちは、彼の人生に常に暗い影を落としていたことは想像に難くない。彼は、十分

な教育を受けずに成長したため、しばしば無教養の謗りを受けたという²⁴⁾。しかし、木版・銅板、スチールの彫工として非凡な技術を持ち、企画性に富むシーマーは、それらのネガティブな面にもかかわらず、風刺画家として次第にその能力を発揮して行った。しかし、彼は、確固とした世評を得ようとするかのように、自らを酷使した結果、しばしば神経衰弱に陥った。1830年のそれは危険なほどであったが、無事立ち直り、1831年からは作品の量も増え順調に仕事をこなしているかに見えた。チャップマン&ホールへ持ち込んだ「ニムロッド・クラブ」案は、活躍の場を拡大し、愛する妻子たちのためにも少しでも経済的余裕を持ちたいとする、父・夫としての彼の誠実さを物語るものであろう。

結局、彼の死は、検察官の検視によって「一時的な錯乱」(‘temporary derangement’)による自殺と断定された。彼の遺体のそばには次のような置手紙があったという。

最高にして最善の妻よ、——私には最善の妻だったのだから——誰をも非難してはいけません。これは私自身の弱さ、私の精神的な弱さなのです。悪意を持って私に敵対した者など一人もいなかったと思います。私はわが国の法律によって死をもって罰されるような罪を犯したことは一度たりともありません。でも、私は死を選びます。私の人生はこれで終わります。できることなら、これまで祈っても得られなかった心の平和を神が許し給うことを²⁵⁾。

この置手紙は、罪人を作るまいとするシーマーの優しさ、あるいは弱さを物語るであろう。しかし、ディケンズやチャップマンらにとって、この置手紙は有利に働いたと思われる。それは、彼らを少しも詰ったり、非難していないからである。彼らが、シーマーの死よりも、むしろ挿絵画家を失った作品の行方に強い関心を払ったのは当然かもしれない。月刊分冊第2号にシーマーの死が読者に報告されている。‘Announcement of Seymour’s Death’と題されたメッセージは、読者には筆者が誰か分からない形でなされているが、ディケンズがチャップマン&ホール宛に書き送った書簡の追伸に言及されている²⁶⁾。この‘announcement’は、主として、「シーマーが描いた残りの絵は [予定では2号の挿絵4枚のところ] 3枚であること」、「読者の意に沿うべく、現在鋭意準備中であ

る」²⁷⁾ことが強調されている。「準備中」に関しては、シーマーに代わる挿絵画家の人選が中心である。

周知のように、選ばれた挿絵画家はロバート・ウィリアム・バスである。彼にとってこの役割は、さまざまな意味で不幸な結果を招いてしまった。前述のように、シーマーの死は突然のことであり、彼が生前仕上げておいた挿絵は、2号に用いる3枚のみであり、チャップマンを始め当事者たちは、その後の展望を探る時間的余裕がなかった。後継者に関して、各自いろいろな意見を持っていたが、結局、チャップマン&ホール専属の彫版工ジョン・ジャックソン (John Jackson) が推薦したバスに白羽の矢が立った。当時バスは、他の仕事にばかりきりであって、作品に挿絵を描くほど時間的余裕はなかったこと、エッチングの技術は持ち合わせていない事情も説明したが、要請に抗い切れず、応諾してしまう。その間の事情をバス自身に語らせよう。

…… [私は] それまで手がけていた仕事を脇において、スティール・プレートを調達し、初めて彫り出したのです。2週間の昼夜を問わない試彫の末、私が選んだ題材は、「観兵式におけるピクウィック」、「あずまやにおけるタップマン氏とウォードル嬢」と「クリケット試合」でした。後者二つが大層好まれました²⁸⁾。

バスは、後の二つは「[チャップマンたちに] 大層好まれた」と自画自賛しているが、彼自身理解していたように、実際はそれらも出来の悪いものであった。試みたエッチングは、2週間以内に工程不可能と知り、プレートをエッチングのプロに外注せざるを得なかったのである。「その結果、挿絵に宿るべき技術的な核は失われてしまった」²⁹⁾。そのため、出版者たちは、ディケンズと相談の上、彼を解雇し、新たに若いブラウン (フィズ) を採用する。

解雇されたバスは、最初このことが自分の挿絵画家としてのキャリアに影響を及ぼすとは考えなかったようである。しかし、『ピクウィック・ペーパーズ』は、ほどなく大評判をとるようになり、いつしかバスは、劣等の挿絵画家という風評に晒されることになった。とりわけ、ディケンズ死後に発表されたフォースターの『ディケンズの生涯』(*The Life Of Dickens*, 1871) が世に出た時、バスへの言及は僅かであったため、

彼は酷く傷つき、フォースターへ弁明の書簡を書き送ったのであった。その中で、バスは、時間不足を最大の理由にあげた上で、次のように不満をぶつけている。

今不満に思うのは、礼儀を失した私の扱い方です。私はそれまでの仕事を脇に置き、新しい絵の技術の修練の時間を諦め、注文に従い、さまざまな絵（スケッチ）を描いてみました。ところが再彫の機会も与えられず、説明すらもなく、仕事は私から取り上げられてしまいました。私が言いたいのは、優れた結果を出したかもしれない私の努力に配慮がなされなかったことです³⁰⁾。

不平の対象は、主に出版者チャップマン&ホールに向けられており、ディケンズに対しては、不満をさほど表明していない。むしろ、偉大な作家と言う世評に従っている。もちろん、書簡がディケンズ一辺倒のフォースター宛であることを考えれば当然であろう。バスは、『生涯』の改訂版には正しい内容を書き込むことをフォースターに依頼している。（結局、フォースターの死に伴い、改訂版は出なかった。）

しかし、実際には、バスは徹底的に排除された。彼は上記の三つの挿絵の他に、No.4用に、二つの絵 [「鮭の影響を受けたピクウィックと友人たち」(Pickwick and his Friends under the Influence of Salmon)、 「挫折」(Breakdown)] を描いていた。チャップマン&ホールたちはそれらをすべて却下したのみならず、採用した二つの挿絵も後の版ではブラウン [フィズ] の絵に差し替えている。確かにバスにとって不運な状況が続いたが、「もう一度チャンスが与えられるなら、関係者が満足する作品を描いたであろう³¹⁾」というのはあくまで仮定の問題であり、その後フィズの挿絵が用いられ続けたことは、それを否定する理由となろう。少なくとも、ディケンズを始め、チャップマン&ホールたちの選択が正しかったことは、程なく『ピクウィック・ペーパーズ』がその新鮮さと面白さで巷を席卷したことでも証明されたとと言える。以後、『ピクウィック』はディケンズを超一流の作家へと押し上げて行った。

『ピクウィック』の誕生にまつわるさまざまな出来事を忘れた頃、ディケンズは再びシーマーの亡霊に悩まされることになる。いわゆる「シーマー論争」の勃発である。

二、シーマー論争とディケンズのスタンス

ディケンズとシーマーの問題は、後者の死により、最初一件落着の様相を呈していた。少なくとも、ディケンズにとってそれは、作品誕生に伴う生みの苦しみの一部であり、それを乗り越え、彼は順風満帆の作家人生をエンジョイしていた。事実、『ピクウィック・ペーパーズ』に続いて、『オリヴァー・トゥイスト』（1838）、『ニコラス・ニッケルビー』（1839）を発表し、今や彼は超一流の作家と自他共に認める存在になっていた。一方、夫ロバート・シーマーの死後、未亡人（Jane Seymour, 1801-1869）と幼い子供たちは、残された遺産で生活することを余儀なくされていたが、それも底を突く状態となった。1840年、彼らの状況を見かねた友人知人たちは、有力な作家と画家たちから献金を募り、挿絵入りの本を出版し、彼女らの経済的困窮を少しでも救おうとお膳立てを始めた³²⁾。しかし、『ピクウィック』との関係で、当然旗振りをすると見られたディケンズは、援助を拒否した。関係者は意外に思ったが、当時のディケンズを取り巻く環境を一瞥すれば、ある程度納得行くものではある。まず、この時期彼は、週刊誌『マスター・ハンフリーの時計』（*Master Humphrey's Clock*）に懸かりきりであった。しかも、*Bentley's Miscellany*での失敗を繰り返さないためにも、投稿・寄稿の類は一切拒否し、すべて自分の手で執筆することにした。しかし、この週刊誌は売れ行きが伸びず、他の手段を模索する中で、*Miscellany*での『オリヴァー』同様、ディケンズ自身の小説を掲載することで急場しのぎを図った結果、周知のように『骨董店』（*The Old Curiosity Shop*）の誕生を見ることになる。時間的余裕のない中で、さらに、彼は *Sketches by Boz* の出版者ジョン・マクローンの未亡人のための慈善出版の準備にもエネルギーを割いていた。計画から3年近く遅延した結果、彼の編集のもと、エインズワースやクルックシャンク等の支援を得て『ピク・ニック・ペーパーズ』（*The Pic Nic Papers*, 1841）が出版された。

シーマー未亡人は、マクローン未亡人に対して行われた慈善出版にそれほど積極的に関わったディケンズが、自分たちに対してなぜ拒否の態度をとるのか、その理由が分からないまま、彼への恨みは膨らみ、その結果精神的に追いやられて行った。「なぜかディケンズは、自分たちを

迫害している、また彼が醸し出す有害な空気が自分たちの希望を台無しにした」³³⁾と彼女は確信を抱くようになった。1849年の6～7月頃、シーマー未亡人と子供たちが次々と病魔に倒れた時、未亡人はたまたまデイクンズに経済的援助を求める書簡を書き送る。その中で彼女は「デイクンズが自分に敵意を見せる理由を問い質すとともに、『ピクウィック』誕生の際の夫の貢献を主張した」³⁴⁾。

デイクンズは、直接回答する代わりに、彼女の書簡をまず、チャップマン宛の書簡に同封して、彼女の主張に正しい点があるかどうか、また1847年の廉価版『ピクウィック・ペーパーズ』の序文に書いた作品誕生に関する文言に遺漏はないかを彼に質し、返事を求める。既述したように、チャップマンの回答の内容を、フォースターは『デイクンズの生涯』に書き込んでいる。デイクンズは、これにまだ満足せず、さらにシーマー未亡人と交際のあったS.C. ホール夫人（Anna Maria Hall, 1800-81）に次のような書簡を書き送っている。

……挿絵画家シーマーの未亡人から、ピクウィックの誕生について言辭を弄した、狂気じみた——侮辱に満ちた酷い——手紙を受け取りました。そこには、私が承知していると言っているが、実際聞いた事もない『ピクウィック』の誕生に関する、始めから終わりまで全くのたaramえを、脈絡もなく書き散らしてありました。また、私が全然知らない、しかし彼女は自分に親切だったという多くの人たちの名前を挙げた中に、貴女とホールの名前がありました。お二人は、私が卑しい男だとか、不当な人間だとはお思いにならないと信じますが、それにしても、この女の主張の厚かましさには閉口します。そこで、もしお二人が彼女と知己の間であったのであれば、我々が「真実」と呼ぶ人生のささやかな真髓と関連して、彼女がいかなる人物かを知って欲しいのです。もし、ご迷惑でなければ、二通の手紙を同封しましょう。一通は、彼女が書き送ってきたもの、他は書籍商のチャップマン氏が、私の要請に応じて回答してきたものです。その際、私はこう記したものです。「同封した書簡に私同様驚いたかどうか、そしてそこに幾ばくかの真実がありや」³⁵⁾と。

この書簡は、デイクンズの直情的な性格をもろに露呈している。ホール

夫人とは知己の間であるが、フォースターやチャップマンに対するほど「コンフィデンシャル」（「内密な話の出来る」）な間柄とも思えない。それにもかかわらず、シーマー未亡人を「精神錯乱者」（‘perfectly mad’）と極め付ける乱暴な言葉を遣っている。ホール夫人はディケンズの性質の一面を知って驚きを隠せなかったであろう。『ディケンズ書簡集』に、彼女との往復書簡がその後しばらくないことがそれを暗示しているようである。

先行研究の多くは、ディケンズの見解に同意して、「悲しみのために、彼女の正常な感覚は正しく事実を理解できなかった」³⁶⁾としている。確かに、シーマー未亡人は尋常な精神を逸脱することがあったのであろう。しかし、ディケンズの感情は、理性で理解していてもそれを抑制できないものであった。既にマクローンやベントリーとの関係で露にされた彼の直情的感情は、ここでも御し切れないことが分かる。彼は、シーマー未亡人を援助することは容易いことであり、それによって社会的評価を上げうることは十分承知していたと思われる。しかし、一度発火した火は、たとえ消すことが重要であると頭で理解しても、一方的に燃え盛ってしまい、それはしばしば破天荒な行動様式をとって表われた。

一方、シーマー未亡人の主張は、果たしてディケンズが言うように、「精神錯乱者」のことはであろうかという疑問が残る。それを検討することは、『ピクウィック・ペーパーズ』の誕生にディケンズの主張するように、「シーマーは一片の貢献もしていない」かどうかを見極めることにもつながる。

シーマー未亡人の書簡は入手できなかったが、彼女が1854年頃私家版で出した『『ピクウィック・ペーパーズ』発端始末記』（*The Account of the Origin of Pickwick Papers*）³⁷⁾の中には、「自分と二人の子供たち、さらに弟が次々と病に倒れた時、ディケンズに援助を求めた。しかし、ディケンズはそれに応えず、無視した」こと、「ディケンズの敵意の原因を知りたい、彼と夫の関係がいかなるものであったかを思い出して欲しい」こと等、前述した通りの内容をディケンズに書き送ったことが書かれている。『ピクウィック』誕生の際には、あれほどの関係がありながら、なぜディケンズは自分にそれほど敵意をむき出しにするのか、これらの疑問は、必ずしもディケンズが極め付けるような、「精神錯乱者」の言葉とつながるとも思えない。問題の一つは、ディケンズがそのよう

な言葉をシーマー未亡人にも遣ったかどうかである。

シーマー未亡人は「始末記」の中に、ディケンズに書き送った書簡の内容を書き添えているが、ディケンズが、「シーマー夫人が言う、自分とシーマーとの関係は事実ではないし、これ以上シーマー夫人とは、関わりたくない」と絶縁状を書き送ったにもかかわらず、彼女は再度ディケンズに次のように問い質している。

貴方は、私が妄想を抱いているとおっしゃいますが、私の亡き夫と貴方との間で取り交わされたことに関して私が述べたことは、あらゆる点で完全に事実であることを断言いたします。ここに再びお手紙を差し上げるのは、私自身のためではありません。子を持つ親の心配から、ご返事を是非とも願います次第です。貴方は私と子供たちに対して、敵意に満ちた態度を取るようですが、もし、私が心の広い世間の皆様、に、貴方があれほど世話になった男の未亡人とその子供たちを、理由もなく理不尽に苦しめた事実を明らかにしたなら、世間の人たちはどう思うのでしょうか。もう一度ご返事をください。私と子供たちに対する敵意に満ちた行動はいかなる理由なのか、また、どのような形で私が貴方に無礼を働いたというのか、是非お答えください³⁸⁾。

この回想記には、シーマー未亡人の悔しさ、ディケンズという超一流の作家への不可解さが滲み出ている。今やシーマー未亡人は、ディケンズが冷酷で、非人間的で、誠実さを欠如した人物であり、人間性を醜悪なものにする偽作家という烙印を押したと言える。しかし、ディケンズの言質も、シーマーの未亡人の主張も、感情的なものが先走っている印象がある。『ピクウィック・ペーパーズ』の誕生に際してのシーマーの貢献度を、第三者的に正確に判定できないだろうか。シーマー未亡人が、1856年ごろ発表した『『ピクウィック・ペーパーズ』発端始末記』は、「悲しみのために、彼女の正常な感覚は正しく事実を理解できなかった。彼女の主張は、主な点で不正確であったし、悪意に染まったものであった³⁹⁾とされ、史料としての価値が疑われている。たとえば、彼女がここで述べている内容の内、「シーマーが『ピクウィック』の創造者である」、「プレートは前もって [シーマーが] 準備していた」、「ディケンズを採用するようチャップマン&ホールに許可したのも、ディケンズの原

稿を承認したのもシーマーである」、「『旅役者の話』を挿入するのを許したのは自分が夫を説得した結果である」等の主張は、確かに正確さを欠いている。

しかし、当事者全員にとって不幸なことに、シーマー未亡人のこの「病的で混乱したパンフレット」によって、論争に終止符が打たれたわけではなかった。1866年3月24日の週刊文芸雑誌『アシニアム』(*The Athenaeum*)に、未亡人の息子の手紙が掲載されたのである。その記事は、父シーマーの『新版スケッチ集』に寄せられた、ヘンリ・G. ボーンの伝記的回想で触れてあった著作権についてのミスを正そうとしたものであった。その際、『ピクウィック』への父の貢献度について語るボーンの言辭に言及し、また、それらの言葉に感じられる母のパンフレットへの冷笑を指摘した上で、彼は次のように述べている。

……もともと『ピクウィック』の] プランは、スポーツ好きのロンドンっ子たちのクラブ員の冒険が対象でした。アイディアとタイトルは、父の創造物でした。父はこのプランを十分理解していたので、これを最初マクリン氏に、後にスプーナー氏に見せたところ、後者は出版の意図を持ち、添える文章をセオダー・フック氏に書かせることを提案しました。父のノートを見ると、最初の4枚の絵は、父が作品に言及する前にエッチングがなされていたこと、また、後に、ディケンズ氏の構想に沿うようエッチングのし直しをし、変更を加えたことなどが推測できます……⁴⁰。

これに対して、ディケンズはすぐ『アシニアム』誌の次の号で、猛烈な反論を加えた。

『ピクウィック・ペーパーズ』(及び他の2、3の本の)著者として、2、3の事実を記したいと思います。コメントは無しです。それは、貴兄が編集者として先週掲載された R. Seymour なる署名入りの書簡に関するものです。

画家のシーマー氏は『ピクウィック・ペーパーズ』に見出される出来事、人物(ウィンクル氏のスポーツ愛好心を除き)、名前、フレーズ、言葉等を創りも、提案もしておりません。また、小生が創り出し

たものを描いた挿絵画家という立場を除いて、何一つ関わっていません。

小生は、シーマー氏の筆跡を一度たりとも目にしておりません。

シーマー氏に会ったのは、ただ一度です。それも彼が不幸にも逝去された24時間前でした。その場に居合わせた二人の証人は存命です。

シーマー氏は、『ピクウィック』の最初の24頁分が活字になった時死去しました。彼の死は、次の3、4頁が完全に書かれる前のことだと思います。また、確信もって言えることは、それは、作品のその後の方向が決まる前のことです⁴¹⁾。

ディケンズの言葉はなお続き、1847年の廉価版『ピクウィック・ペーパーズ』の序文を引用した後、シーマー未亡人の主張に関連して、チャップマンに問い合わせ、確認を得たことなど、既に検討済みの事柄を執拗にくり返している。ここには、シーマー Jr. の主張を覆そうと躍起になっているディケンズの姿が浮かんでくる。彼がいかに憤怒の中でこの書簡を認めたかは、1、2のミスに表われている。「……の最初の24頁分が活字になった……」の数字は、「26」が正しく、また「……次の3、4頁が」の数字も「24」が正しい。パテンは、雑誌の編集者が読み違えたのだらうと説明しているが⁴²⁾、ディケンズの感情の高まりに帰した方が適切と思われる。その後、『アシニアム』誌上論争は、シーマー Jr. が再度主張を繰り返す書簡を書き送ったのに対して、編集者たちが掲載を拒否したことにより終止符を打った。同時に、飛び飛びではあるが、およそ30年続いた『ピクウィック・ペーパーズ』誕生論争も終わりを告げるようになった。

しかし、ディケンズが一貫して主張した「シーマー無関係論」は、完全に正しいのであろうか。シーマーは、ホールがこの企画にディケンズを誘う前に、ロンドンのスポーツ好きの面々の絵をたくさん描いていたこと、それらの絵の説明文 (letterpress) を書く人物を求めていたこと、さらに、ピクウィックの最終的なデザインは、後にエドワード・チャップマンが、シーマーの最初のスケッチで描かれたような、痩せたひよろ長い人物ではなく、太った人物にすべきだとの提案によって変更されたが、以前からシーマーが描いていたタイプの人物に基づいていたこと、1、2号に見られる、クリケット試合、スケートや狩等のスポーツに関

する出来事を優先させたことは、シーマーが提案した「ニムロッド・クラブ」に基づいており、実際、読者への広告、月刊分冊のカバー・デザイン、最初の挿絵、スポーツ自慢のウィンクルを登場させたこと等にそれは表われている。また、2号にわたりカバーにシーマーの名があったことは、読者に訴える力を示すものであったこと、なぜなら、シーマーは当時イギリスでも、ジョン・リーチに次ぐ政治戯画の人気者であったから、等々は決して無視できない事柄である。つまり、『ピクウィック・ペーパーズ』誕生にシーマーは無関係ではないのである。従って、ディケンズが完全否定しようとする意識が問題となろう。

確かに、シーマーの存在は、この企画の成功を保証するものではなかった。シーマーが関わった初期の月号は、シーマー未亡人が主張するような「前例を見ない売り上げ」とは程遠く、第二号は500部程度しか捌けなかった。また、「幻惑された読者は、お気に入りの画家が描いた最後の絵を購入していると信じていたのだ」⁴³⁾とも言えない。たとえシーマー未亡人が、夫の技術が本来値しない作品を豊かにしたのだと確信を持っていたとしても、また、貧しく哀れな作家であったディケンズを受け入れるよう夫に薦める雅量を持っていたと主張しても、夫亡き後の『ピクウィック』に関しては、その成功に貢献したとは言えないのである。

それにもかかわらず、シーマーが『ピクウィック』誕生に関わりがないとするディケンズの主張も認めることはできない。何がディケンズをしてそのような姿勢をとらせたのであろうか。我々は、とりあえず、彼の直情的な、抑制できない、独特の性格に帰しておこう。前稿で指摘したように、憤激した時のディケンズは、手の付けられない人間に豹変したという。フォスターは、マクローンの行動に憤激した時のディケンズを評して、次のような人間観を伝記に残している。

どんなことにせよ、未決定の状況なるものは、この作家にとって我慢がならなかった。……何をやるにも「着手」から「完了」までの時間を待ち切れず、その時間を切り詰めるか、早速にけりをつけるかするためなら、彼はどんな犠牲も厭わなかった。これは、彼の性格の長所とは言えない面で、そこに付け込まれたことも一再ならずあった⁴⁴⁾。

彼の御し難い性格に驚く様子は、当時の人々の証言にもある。カーライル夫人は、初対面のディケンズの印象を「鋼鉄でできているのかと思いました」⁴⁵⁾という言葉を残している。リー・ハントは、やはりディケンズとの初対面の翌日、フォースター宛に手紙を書いている。「いやはや客間でああいう顔にお目にかかろうとは！ あの顔のなかには、50人分の生命と魂が同居している」⁴⁶⁾と驚きの声をあげている。ジョージ・エリオットは1852年頃、ある協議会で議長を勤めるディケンズの有無を言わさぬ態度にやはり驚いている。これらの体験は、ディケンズの外見に言及しただけだが、鋭い観察眼を持った彼らは、彼の性格を見通していたと思われる。

ディケンズ自身そのような自分の性格の意味を理解していたと思われる。44歳（1855年）の時、彼はマリア・ビードネルへの若き日の恋情についてフォースターに尋ねられた時、自己の直情的性格を次のように告白している。

……貴兄の言われることが、他ならぬ小生の感情についてでしたら小生の性質がどんなに手に負えない激しいものであるかをひとつ考えて欲しいのです。……それが4年にもわたって小生の頭から他の考えを一切追い出したのです。……若者の頭にとり憑いた狂気の沙汰の恋心をあんなにも執拗に追い続けてきたのですから、今、それら一切の原因になった人の姿を見れば、自制の心がたちまち失われていくと思います⁴⁷⁾。

ディケンズは、ここで若き日の一途な恋情を得意気に回想しているが、彼の感情をまとめれば、「感情については、小生の性質がどんなに手に負えない……頭から他の考えを一切追い出し……頭にとり憑いた狂気の沙汰をあんなに執拗に追い続け……自制の心がたちまち失われていく」となる。このような彼の性格は、生涯を通して一貫しており、関係者との間にさまざまな摩擦を生んだと同時に、それが作品中の特異な人物像として描かれているとするのが筆者の論点である。

注

1) Arther Waugh, 'The Birth of Pickwick', *The Dickensian*, Vol.32. pp.121-

124. 筆者は、1936年当時チャップマン&ホール社の会長として、この出版社の経営責任者（Chairman, Chapman & Hall, LTD）であった。
- 2) J. W. T. Ley ‘Buss’s *Pickwick*—Pictures—An Important Letter’. *The Dickensian*, Vol.32. 1936, pp.101-104.
- 3) 宮崎孝一他訳 『ディケンズの生涯』研友社、上巻、52頁。
- 4) J. W. T. Ley, *op.*, *cit.*, p.101.
- 5) Arther Waugh, *op.*, *cit.*, p.121.
- 6) See K. J. Fielding, ‘Charles Whitehead and CD,’ *Review of English Studies*, III 1952, 141-154.
- 7) See Graham Storeys eds., *The Letters of Charles Dickens*, Vol. I, p.207, n.7.
- 8) バスは、ディケンズが書いたスケッチに挿絵を描いたという因縁があった。
- 9) T. W. T. Ley, *op.*, *cit.*, p.102.
- 10) 宮崎孝一他訳、前掲書、51頁。
- 11) 1847年に出版された廉価版『ピクウィック・ペーパーズ』の序文にディケンズ自ら作品誕生について回想している。彼は、この序文をその後の論争の根拠にしている。
- 12) Arther Waugh, *op.*, *cit.*, p.122.
- 13) Storeys eds., *op.*, *cit.*, Vol.V, p.575, n.3.
- 14) Arther Waugh, *op.*, *cit.*, p.123.
- 15) R. L. Patten ed., *Pickwick Papers* (Penguin Books, 1983), p.923.
- 16) Arther Augh, *op.*, *cit.*, p.123.
- 17) 宮崎孝一他訳、前掲書、上巻、50-51頁。
- 18) Storeys eds., *op.*, *cit.*, Vol. I, p.283.
- 19) *Ibid.*, p.136, n.2.
- 20) 『ピクウィック』には、これを含めて九つの挿話がある。
- 21) Storeys eds., *op.*, *cit.*, Vol. I, p.146, n.2.
- 22) *Ibid.*, p.146, n.1.
- 23) *Ibid.*, p.146, n.2.
- 24) *Ibid.*, p.146, n.3.
- 25) Quoted in Storeys eds., *Letters*, Vol. I, 146, n.5.
- 26) R. L. Patten eds., *op.*, *cit.*, p.900.
- 27) *Ibid.*, p.900.
- 28) J. W. T. Ley, *op.*, *cit.*, p.103.
- 29) *Ibid.*, p.104.
- 30) *Ibid.*, p.104.
- 31) *Ibid.*, p.104.
- 32) 小説、戯曲など多彩な作品を書いたホール夫人は、1840年、慈善出版の

ために、レディ・ブレッシントンやブルワー・リットン等から募金を募ることをシーマー未亡人に約束した。慈善出版の本には、クルックシャンク、フィズ、それにバス等の挿絵、さらには亡きシーマーの未発表のエッチングが添えられることになっていた。See Storeys eds., *op., cit.*, Vol.V, p.575, n. 5.

- 33) Patten, *op., cit.*, p. 920.
- 34) Storeys eds., *op., cit.*, Vol.V, p.575, n.6.
- 35) *Ibid.*, pp.575-576.
- 36) Patten, *op., cit.*, p.921.
- 37) Reprinted in W. Miller and E. H. Strange, *A Centenary Bibliography of the Pickwick Papers*, 1936.
- 38) Storeys eds., *op., cit.*, Vol.V, p.576, n.3.
- 39) Patten, *op., cit.*, p.920.
- 40) *Ibid.*, p.921.
- 41) *Ibid.*, p.922.
- 42) See *Ibid.*, p.922.
- 43) *Ibid.*, p.922.
- 44) 宮崎孝一他訳、前掲書、上巻、57頁。
- 45) 同書、上巻、54頁。
- 46) 同書、上巻、54頁。
- 47) 同書、上巻、41頁。